

日本関係洋古書の我が国での所蔵状況について

齋藤ひさ子
蛭田 顕子
渡邊富久子

1. はじめに

西洋人が日本について記した書籍は、これまで国内の様々な機関で収集されてきている。明治維新以後、東西交渉史研究に力が注がれるようになり、国内には有力なコレクションを持つ図書館も数多く出てきた。

当館でも、1948年の創立以来、唯一の国立図書館として、諸外国で出版された日本に関する研究書を収集・整備することに、外国図書収集の重点部門の一つとして意を注いできており、それらは「日本関係欧文図書」「日本関係資料」などと呼ばれている。

具体的な資料を紹介すると、まずマルコ・ポーロの『東方見聞録』⁷¹⁾(1496) [著者・書名については広く知られている場合は日本語形とし、巻末に原語で書誌情報を一括掲載した] を筆頭に、メンデス・ピント (Fernão Mendes Pinto, 1509-1583) の『東洋遍歴記』⁶⁹⁾(1614) など、大航海時代を背景に、日本を含むアジアを旅したヨーロッパ人による旅行記、航海記の類がある。

次に、ザビエルが来日した16世紀の中頃から鎖国が完成する17世紀の中頃にかけては、イエズス会を中心に、キリスト教宣教師らが報告書や書簡類を盛んに作成した。鎖国後は、長崎出島のオランダ商館関係者による日本滞在記の類が多数出版されており、ケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651-1716) の『日本誌』⁵⁰⁾(1727) やシーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796-1866) の『日本植物誌』⁸³⁾(1835-44) 等は、特に有名なものであろう。

18世紀以降になると、鎖国日本との和親・通商を求めたロシア、イギリス、アメリカ、フランスなどの日本遠征隊が、日本との交渉に関して記した「遠征記」の類がある。例えばロシア人のリコルド (Petr Ivanovich Rikord, 1776-

1855) の『1812-1813年の日本航海記』⁷⁷⁾ (1816) や、ゴロヴニン (Vasillii Mikhailovich Golovnin, 1776-1831) の『日本俘虜実記』³⁹⁾ (1816) 等である。

開国後は、日本に関する情報が豊富になると同時に、日本への関心も高まり、文化、歴史、経済、産業など様々な分野の資料が時代と共に大量に刊行されるようになり、現在に至っている。

こうした日本に関する欧文資料については、19世紀半ばから今日まで、海外で様々な書誌が作成されてきているが、その嚆矢として知られているのはレオン・パジェス (Léon Pagès, 1814-1886) の『日本図書目録』*¹ (1859以下、パジェス) である。これは15世紀以来、1859年に至るまでに刊行された日本に関する著作の書誌で、例えば『東方見聞録』の場合、ヴェネツィア版 (1496) の他、イタリア語版数種に続き、ラテン語、仏語、独語、葡語、西語、英語の各版が記載されている。同様に658件の著作について、翻訳や異版を調査して1,347タイトル (以下、t.) を収録し、これに補遺19t.と写本48t.を加えて、全体で1,414t.を掲載している。この資料の増補改訂を目指したフランスの東洋学者コルディエ (Henri Cordier, 1849-1925) は、*Bibliotheca Japonica**² (1912) を刊行し、こちらは収録年代を1870年まで延長して、約3,500件を収録している。

一方、パジェスの『日本図書目録』の収録文献刊行年を引き継ぐ形で、1859年以降の刊行資料を収録しているのが、ウェンクシュテルン (Friedrich von Wenckstern, 1862-1914) の*A bibliography of the Japanese empire**³, v.1-2 (1895-1907) である。この書誌は、その後*Bibliographie von Japan**⁴ というタイトルでオスカー・ナホッド (Oskar Nachod, 1858-1933) が引継ぎ、更にプレーゼント (Hans Praesent)、ヘーニツシュ (Wolf Haenisch) らが1943年までの刊行物について編集し*⁵、戦前期の系統立った日本研究書誌となっている。ちなみに、パジェスの『日本図書目録』からナホッド、プレーゼント、ヘーニツシュらにより編集された*Bibliographie von Japan*に収録された文献、即ち15世紀末から1943年までに刊行された文献を合わせると、全部で53,543件が出版されていることになるという*⁶。

この他、網羅的なものではないが、*Bibliographischer Alt-Japan-Katalog**⁷ (1940) は、1542年から1853年までの間に、ヨーロッパで印刷刊行された日本関係文献のうち、ドイツ、及び18の日本の大学付属図書館や研究所が所蔵している書籍1,624件を収載する総合目録である。ベルリン日本研究所の主事トラウト (Friedrich Max Trautz, 1877-1952) の尽力により、京都ドイツ文化研究所で印刷刊行されたもので、その4分の1は、ウェンクシュテルン

やコルデイエに未収録の資料であると言われている*8。また、カピッツァ (Peter Kapitza) の *Japan in Europe* *9 (1990) は、以上の書誌に収録されていない図書も取り上げながら、ヨーロッパでの日本像を原文、又は独訳で紹介した大著で、日本関係書の書誌としても使えるものである。

以上をみると、各書誌の基準に揺れがあるものの「日本関係」とされる欧文献全体を把握することを目指した書誌は、外国での編集・刊行が先行しており、日本自体では未だ刊行されていないのが現状である。

しかし、当館をはじめ、日本国内の各機関で、こうした日本関係書は相当数所蔵されており、主なものとしては、東洋文庫の所蔵するモリソン文庫、筑波大学図書館のベッソン・コレクション、上智大学キリシタン文庫、横浜開港資料館のブルーム・コレクションなどの有名なコレクションもある。また、この他にも国際日本文化研究センター（以下、日文研）、国際文化会館図書室、天理図書館など、古くから日本関係欧文献を広く収集し、貴重な資料を所蔵している図書館や研究機関があり、所蔵する日本関係書の目録を刊行しているところも多数ある。

これら各機関が所蔵する日本関係欧文献の、総合的な目録は今のところ作成されていないものの、今日では、Laures Rare Book Database*10（上智大学キリシタン文庫）のような個別の主題の総合目録や、各所蔵機関がホームページで提供しているデジタルコンテンツ等によって、個別の資料の書誌確認や所在調査は言うに及ばず、場合によってはタイトルページや、本文までが電子画像としてインターネットで確認できるため、異版やテキストの確認などが非常に容易になっている*11。

こうした状況は海外で所蔵されている資料についても同様で、日本国内では未所蔵の資料でも、British LibraryやLibrary of Congressなど大型図書館のOPACや、COPACなどの各国の総合目録、及び出版国のOPACによって、古書、貴重書までもが容易に検索可能になった。

本稿は、このように国外で多数刊行されている日本関係資料の中でも、特に、ペリーの来航した1853年以前（この区切りは *Bibliographischer Alt-Japan-Katalog* にも一致している）に刊行された図書資料を「日本関係洋古書」と定義し、それらの刊行状況全体を把握すると共に、当館を含む国内の所蔵状況を調査したものである。

2. 調査方法

2.1 日本関係洋古書のデータ抽出

まず各種の目録で「日本関係」として括られている欧文資料が、1853年以前にどれだけ刊行されたかを把握するため、国内外の日本関係書誌及びデータベースから、可能な範囲で書誌情報を収集することにした。しかし、国内外のOPAC、書誌などの検索が容易になったとはいえ、それらを個別にすべて調査することには作業量の限界がある。また「日本関係」「日本研究」という基準について、各書誌に揺れが生じているであろうことは否定できない。従って、世界で出版された日本関係欧文文献すべてを網羅する調査には至らないことを始めにお断りしておく。

そこで、主となる情報源として、前掲の総合的な書誌から、1853年以前をカバーする書誌であるコルディエの *Bibliotheca Japonica* (以下、コルディエ) を選択することにした。コルディエは、パジェス、ウエンクシュテルン、ナホッドらが編集した先駆的な書誌はもちろん、ゾンメルフォーゲル (Carlos Sommervogel, 1834-1902) らのイエズス会書誌や、メジョフ (Vladimir Izmailovich Mezhev, 1831-1894) の『アジア書誌』*¹² (1891-94) など、多くの東洋書誌、専門書誌の集大成で、異版関係、引用文献、所在などの記述もあり*¹³、前述の Laures Rare Book Database や『日本関係欧文図書目録 - 1900年以前刊行分』*¹⁴ (日文研) 等、各種の目録で引用され、古い年代の日本関係文献の書誌として、現在でも評価が高い。

コルディエ掲載の資料は写本や雑誌記事、1854年以降の刊行物を除いて、すべてを調査対象とした。そして、対象資料が少なくとも世界のどこかの機関で所蔵されていることを確認するため、Laures Rare Book Database、NACSIS-Webcat、ヨーロッパの主要目録類*¹⁵の順で、その所在を確認した(孫引き等による偽書誌を排除する目的でもある)。この作業で所在を確認できないものは調査対象からはずした(189件ほど出た)。

一方、こうした検索過程でコルディエ未掲載の同一著者による別著作や異版、翻訳などが発見されるので、これらも調査対象に追加した。さらに、前掲 *Bibliographischer Alt-Japan-Katalog* や *Japan in Europe*、ベッソンコレクションの目録*¹⁶、横浜開港資料館の『ブルームコレクション目録1-4 (1982-87)』、『日本関係欧文図書目録 - 1900年以前刊行分』(日文研) の他、内田嘉吉文庫

目録*¹⁷（千代田区立千代田図書館）、*Nipponalia**¹⁸（京都外国語大学）からコルディエ未収載資料を追加し、調査対象とする「日本関係洋古書」2,029t.を確定した。

2.2 国内での所蔵調査

次に、この2,029 t.について国内での所在を調査した。実際の作業では、上記のデータ抽出に際して利用したLaures Rare Book Database、NACSIS-Webcat他のツールで、かなりの所在情報がわかったが、これらには漏れている所蔵情報もあると思われるため、特にNDL-OPAC、東洋文庫のホームページ*¹⁹、『天理図書館稀書目録 洋書之部』*²⁰を検索した。

また、筑波大学、日文研、横浜開港資料館、千代田図書館、京都外国語大学の所蔵については、それぞれが刊行する前掲目録類で確認した。所蔵調査は以上の方法で行ったので、各機関の所蔵の実態を必ずしも正確に反映していないかもしれない。以下における分析数字については、その点を理解されたい。この方法で国内の所蔵が確認されたのは、対象資料2,029 t.のうち1,312 t.であった。また、国内で所蔵点数の多い機関は天理大学、上智大学、東洋文庫、筑波大学、国立国会図書館、京都大学、日文研、東京大学、九州大学、京都外国語大学、横浜開港資料館、千代田図書館などであった。

2.3 分析項目

このようにして集めた「日本関係洋古書」について、様々な角度からの分析を行うため、分析項目として出版年、出版エリア、言語、版次、翻訳情報、ジャンル、所蔵館名、所蔵館数を選び、相関分析をしやすくするために、これらの項目をフィールドとするエクセル表を作成した。

出版エリアについては、まず出版地（都市）を入力し、それらを14エリアーアジア、イギリス、イタリア、スペイン、ドイツ、フランス、ベネルクス、ポルトガル、ロシア、中南米、東欧、北欧、北米、不明ーに分類した。このうち、イギリスはアイルランドを含んでおり、ドイツはオーストリアとドイツ語圏スイスを、フランスはフランス語圏スイスを、ロシアは旧ソ連地域を含めている。

また、調査対象資料には様々な主題のものが含まれているが、本稿では現代的な分類体系ではなく、こうした資料が刊行された背景を重視して、表1のような独自のジャンル別分類を行った。

表1 ジャンルの体系

A	航海記・紀行
A1	旅行者自身による旅行記
A2	旅行記集成
A3	アジア史・誌
A4	その他
B	キリシタン関係
B1	書簡・年報・通信類
B2	迫害・殉教記
B3	キリシタン版・海外キリシタン版
B4	布教史
B5	伝記
B6	遣欧使節関係
B7	その他
C	日本誌・日本論
C1	日本滞在者による日本誌
C2	博物誌・医学
C3	来日していない人による日本論
D	その他
D1	日本語学
D2	一般世界史
D3	文学作品
D4	その他

以上のように、1853年以前に刊行され、国内外いずれかに所在が確認できた資料について各種の分析ができるようにデータを整備したが、なお、細かい点について補足すると、多巻物は全体で1タイトルとし、異なる巻がコルディエに別々に収載されている場合、1タイトルとして統合した。こうした重複による排除は157件あった。また、コルディエに収載されている写本28件についても排除した。写本はイエズス会の通信類の原本をはじめ、写本で流布した旅行記、アジア誌などがあるが、これらをまとめた目録は作成されておらず、書誌情報、所在情報が簡単には得られないので、対象としていない。また、コルディエには、トルセリーノ (Orazio Torsellino, 1545-1599)

やブフル（Dominique Bouhours, 1628-1702）の「ザビエル伝」^{12) 92)} のように非常に多数の異版が収載されている例があるが、テキストが同じであると思われるものは調査対象からはずした場合があることをお断りしておく。

2.4 分析対象資料のCordier, Lauresのカバー率

本章の最後に、今回の調査対象の抽出で大きな役割を果たしたコルディエと Laures Rare Book Database の2つの目録について、調査対象全体に占める比率を調べた結果を述べる（表2-3）。まず、調査対象の2,029t.に対してコルディエのカバー率は全体の64.7%であった。また、国内所蔵の有無に対してのコルディエのカバー率も、それぞれ6割強で平均した割合であった。これに対してLaures Rare Book Databaseは、キリシタン関係が中心なのでカバー率は全体の46.6%と下がるが、Lauresの収録するものの83.0%が国内で所蔵されており、国内各機関はキリシタン関係資料をよく所蔵していると言える。

表2 Cordierのカバー率

(単位 t.)

	Cordierに有り	Cordierに無し
国内所蔵 1,312	858	454
	国内所蔵の65.4%	国内所蔵の34.6%
	Cordierに有りの65.3%	Cordierに無しの63.4%
国内未所蔵 717	455	262
	国内未所蔵の63.5%	国内未所蔵の36.5%
	Cordierに有りの34.7%	Cordierに無しの36.6%
計 2,029	1,313 (全体の64.7%)	716 (全体の35.3%)

表3 Lauresのカバー率

(単位 t.)

	Lauresに有り	Lauresに無し
国内所蔵 1,312	785	527
	国内所蔵の59.8%	国内所蔵の40.2%
	Lauresに有りの83.0%	Lauresに無しの48.6%
国内未所蔵 717	161	556
	国内未所蔵の22.5%	国内未所蔵の77.5%
	Lauresに有りの17.0%	Lauresに無しの51.4%
計 2,029	946 (全体の46.6%)	1,083 (全体の53.4%)

3. 日本関係洋古書の出版状況

本章では、15世紀後半から1853年までに、日本関係著作がどのような傾向を持って出版されてきたかを概観したい。

3.1 数値で見る全体像

(1) ジャンル

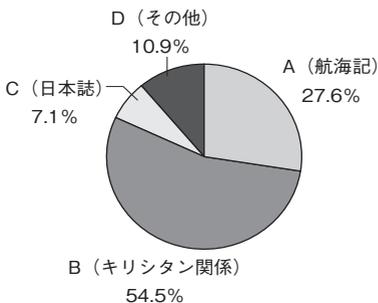


図1 ジャンル内訳

今回の調査対象である2,029t.について、ジャンルごとの比率を見ると、Bが54.5%、Aが27.6%、Dが10.9%、Cが7.1%という構成になっている(図1)。

Aは27.6%とかなり多いが、航海記は当時よく読まれるジャンルだったため、改版や増刷、翻訳も多かった。この中には、リンスホーテンの『東方案内記』⁵⁶⁾(1595-96)やピントの『東洋遍歴記』⁶⁹⁾(1614)のように、重要な日本の記述を含むもの

もあるが、日本が特に多く扱われていないものもあり、日本関係の程度の差が大きい。

Bは54.5%と大きな割合を占めているが、1549年にザビエルが来日し、1639年に鎖国が完成するまでの期間が90年に過ぎないことを考えれば、キリシタン宣教師の報告や通信活動がいかに活発であったかを思わせる。また、この時期のパリでは宗教改革の影響で、宗教関係の出版が盛んでその比重が高かったが*21、全ヨーロッパ的にも宗教的な内容の出版物が多かったことが推測されるので、それもBの出版量の多さの一因であろう。

Cは、7.1%と占める割合は少ないが、この中にはケンペルやシーボルトらの日本研究史上重要な著作が含まれている。また、大航海で発見した世界を記述する博物学が18~19世紀のヨーロッパで流行し、各種学問が興隆してきたのと連動し、日本の記述も学術的になされるようになっていく。

Dの割合は約1割程度と多くない。この中には日本語学(D1:17t.)や、日本をモチーフにした文学作品(D3:32t.)といったものも含まれている

が、これらはその中でも数が少ない。世界史的観点からの著作（D 2、D 4）については、日本に関する記述は多くはないが、ヨーロッパ人が航海記やイエズス会の年報などを通して得た日本の知識を活用して著されたものが多く、当時のヨーロッパにおける日本像はどのようなようであったかを想像させるものである。

各ジャンルの内容を「日本」という観点から見ると、AとDは、狭義の日本関係と言える著作ではなく、アジアという広域の中で、又は世界の中で日本が扱われている著作であり、BとCは日本を中心にしている著作が多いことがわかった。

(2) 出版年

図2にある通り、キリシタンの年報などの出版の多かった17世紀前半に出版量の山があり、この時期までに全体の46%が刊行されている。その後18世紀後半まで減少し続け、19世紀に入ってから再び増え始めている。B、C（日本を中心に書かれている）とA、D（アジア、又は世界の中の日本について書かれている）とに分けて見てみると、キリシタン関係の出版物の多い時期（16世紀後半～17世紀後半、17世紀後半には特にザビエルの書簡集、ザビエル伝が数多く出ている）、オランダ商館関係者の著作の多い時期（19世紀以降）にはB、Cの出版量がA、Dを上回るが、その間の18世紀はA、Dの数がB、Cを上回っている。18世紀は概して、それ以前に出版された日本情報がヨーロッパ人によって咀嚼されていた時期と言えるだろうか。

さらに日本を中心とした著作の多いBとCを見ると、内容的にはBは16～

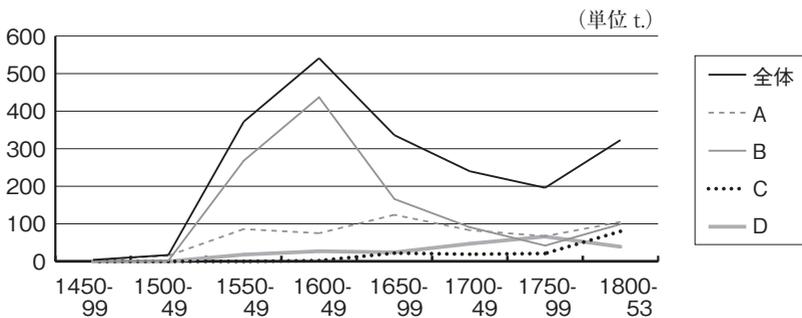


図2 出版年による出版量の変化

17世紀中心、Cは18世紀以降中心と言えるのだが、Cの出版量はどの時期を通じてもBの出版量を上回ることにはなかった。ここからも、Bと比較したCの出版量の少なさがうかがえる。Cの著者の数は47人で、Bの著者270人よりも圧倒的に少ない。鎖国により、こうした著作の書ける人の来日が非常に減少したからであろう。また、オランダ商館日記や手紙を初めとする原資料自体はオランダに豊富に残されているようだが*22、それは主に貿易の記録であり、内部資料としての扱いで出版物として刊行されなかったようである。年報を積極的に刊行していたイエズス会との違いは大きい。

(3) 出版エリア

出版地をエリア別に見ると(表4)、フランス21.1%、イタリア20.5%、ドイツ15.1%、ベネルクス13.8%となっている。また、出版エリアごとに各ジャンルの出版量を見ると(図3)、イタリアはキリシタン関係の出版が多く、フランス・ドイツでは各ジャンルとも1~2割の一定した刊行量がある。ベ

表4 出版エリア別出版点数

								(単位t.)	
フランス	イタリア	ドイツ	ベネルクス	イギリス	スペイン	ポルトガル	その他	合計	
428	415	307	280	172	153	85	189	2,029	
21.1%	20.5%	15.1%	13.8%	8.5%	7.5%	4.2%	9.3%	100%	

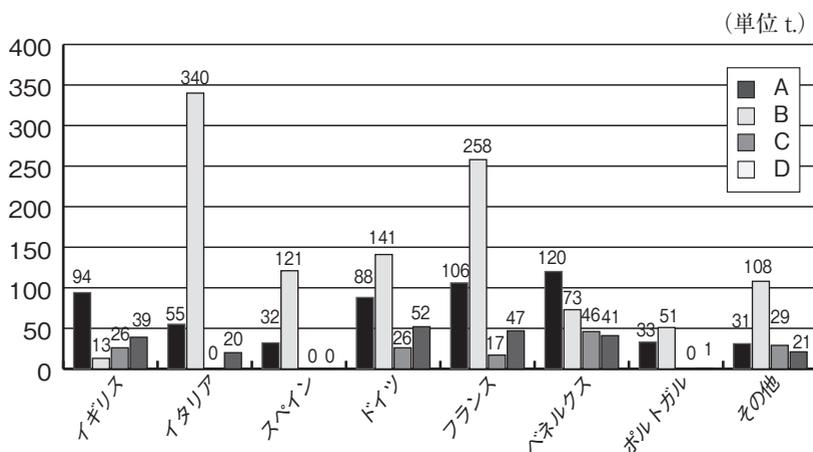


図3 出版エリアごとの各ジャンル出版量

ネルクスでも全体的な出版量が比較的多いが、出版の自由があり出版業が活発だったためと思われる。注目したいのは、キリシタンの日本関係出版物(B)の多かったイタリア、スペイン、ポルトガルにおいて、オランダ商館関係者による日本関係著作(C)の出版が全くないことである。また、イギリスは、Bが13 t.と少なく、Aが多いのが特徴である。ベネルクスも同様な特徴を示している。

(4) 言語

言語ごとの比率を見ると、フランス語が23.6%、イタリア語が17.1%、ラテン語が15.1%などとなっている(表5)。その他の言語としては、日本語、ロシア語、スウェーデン語、ポーランド語、ハンガリー語、デンマーク語、中国語などがある。また、言語ごとの各ジャンルの出版量を見ると(図4)、出版エリアで見たときと似た状況がある。フランス語は全ジャンルにわたってよく出版されている。Bが多く出版されているイタリア語、スペイン語、ポ

表5 言語別出版点数

(単位t.)

フランス語	イタリア語	ラテン語	ドイツ語	スペイン語	英語	オランダ語	ポルトガル語	その他9言語	合計
479	347	306	239	213	185	123	75	62	2,029
23.6%	17.1%	15.1%	11.8%	10.5%	9.1%	6.1%	3.7%	3.1%	100%

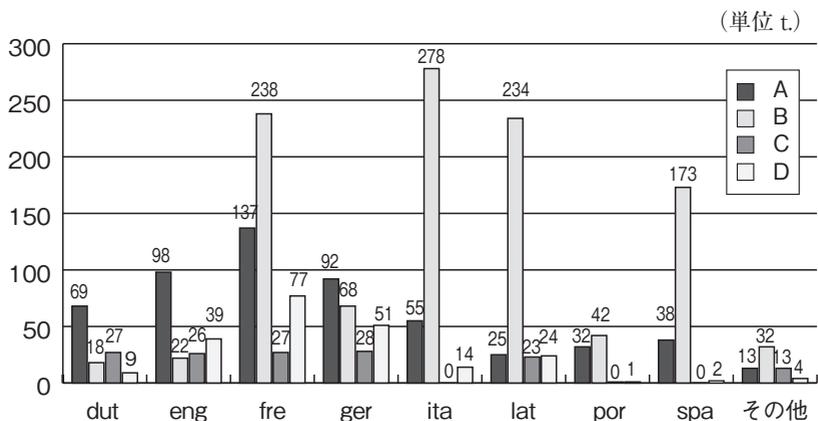


図4 言語ごとの各ジャンル出版量

ルトガル語では、大航海時代の著作もあるため、Aの出版も割と見られるがCは出版なし、Dも少なめとなっている。ドイツ語、英語、オランダ語では、Cの絶対量が少ないためB、CよりもA、Dが多くなっている。

3.2 各ジャンルの出版傾向

次に各ジャンルの中で、日本関係著作の出版の傾向がどのようなものであったのかについて具体的に見ていきたい。

(1) キリシタン関係 (ジャンルB)

表6の通り、鎖国前(1639年以前)は宣教師による書簡や年報を中心とした通信類が多い(B1:鎖国前37t./鎖国後56t.)。これらは日本での布教活動についての記録であるが、付随して日本人の風俗や習慣もよく記録されている。また、宣教師が来日していた時代にほぼ集中して出版されたものに、遣欧使節関係の著作(B6)とキリシタン版(B3)がある。

1584～85年の天正遣欧使節の訪欧は、当時のヨーロッパで大変な話題となり、ローマ教皇グレゴリウス13世との謁見記録を中心に、57t.が確認できる。特にイタリアでは、32t.もの資料が様々な都市で出版されている。1615年の慶長使節に関するものは15t.である。

キリシタン版は、天正遣欧使節がヨーロッパから持ち込んだ印刷機で印刷されたものであるが、最初のもは1588年にゴアで刊行された『原マルチノの演説』⁶⁶⁾である。その後、日本国内でも印刷が始まり、1591年に加津佐で『サントスの御作業のうち抜書』⁸²⁾や、国内初の教義書『どちりいな・きりしたん』³⁰⁾が刊行され、『太平記抜書』⁹⁸⁾(c.1612)まで31t.が確認できた。

表6 ジャンルBの出版年別出版点数

(単位t.)

出版年	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B計
1450/99	0	0	0	0	0	0	0	0
1500/49	2	0	0	0	0	0	0	2
1550/99	169	4	21	9	6	57	2	268
1600/49	207	75	16	53	67	15	4	437
1650/99	24	7	0	63	71	0	1	166
1700/49	7	3	0	42	38	0	1	91
1750/99	9	5	0	14	12	0	2	42
1800/53	11	4	0	33	49	1	1	99
計	429	98	37	214	243	73	11	1,105

1614年の宣教師追放後は、1620年にマカオで1t.⁷⁹⁾ 刊行されたことが確認できる。

1587年の禁教令以降キリシタン弾圧が激化するに伴い、殉教や迫害の記録が出始め、1640年代までに79t.を数える。全般にこの時期の資料は、迫害史の様相が強く、残虐さを強調したものが多い。代表的なものに、カルデムの『日本殉教精華』¹⁷⁾ (1643)、元和大殉教の犠牲となったスピノラの伝記⁸⁷⁾がある。

鎖国後は日本の生の情報を伝える資料の出版が減少し、布教史 (B4: 鎖国前 47t. / 鎖国後 167t.)、ザビエル等の伝記 (B5: 鎖国前 64t. / 鎖国後 179t.) へと移っていく。

布教史の代表には、マッフエイの『東洋イエズス会史』⁶⁰⁾ (1588)、グスマンの『東方伝道史』⁴²⁾ (1601)、クラセの『日本教会史』²⁷⁾ (1689)がある。シャルルヴォアの『日本キリスト教盛衰史』²⁰⁾ (1715)、『日本全史誌』²¹⁾ (1736)は、日本文化についてもよく伝えたもので、フランスでは多くの版を重ねている。

伝記 (B5) 243t.のうち、およそ8割はザビエルの伝記である。トルセリーノの『聖ザビエルの生涯』⁹²⁾ (1594)は29t.、プフルの『聖ザビエル伝』¹²⁾ (1682)は48t.が見られ、19世紀に至るまで版を重ね、各国語に翻訳されている。これと関連して、B1の書簡・通信類で鎖国後に出版されたもの (56t.)のうち、半数以上の29t.はザビエルの書簡集であり、これも19世紀に至るまで出版が見られる。

表7 ジャンルBにおける鎖国前後の主要言語の割合 (単位 t.)

	全体	イタリア語	ラテン語	フランス語	その他
鎖国前	668	206 (30.8%)	150 (22.5%)	106 (15.9%)	206 (30.8%)
鎖国後	437	72 (16.5%)	84 (19.2%)	132 (30.2%)	149 (34.1%)

Bのジャンルで言語に注目すると、鎖国前はイタリア語とラテン語の割合が大きかったのに対し、鎖国後はフランス語の割合が大きくなっている (表7)。スペイン語とポルトガル語について見ると (表8)、来日宣教師の多くはスペイン人とポルトガル人だったにもかかわらず、通信・書簡・年報 (B1)で、スペイン語53t. (12.4%)、ポルトガル語18t. (4.2%)とそれほど多くはない。原文写本はスペイン語やポルトガル語であったが、出版に際しては翻訳したイタリア語やラテン語を使った可能性がある*²³⁾。それに対して迫害・殉

教記（B2）では、スペイン語の著作が34t.（34.7%）と最も多い。また調査の結果、通信・書簡・年報（B1）と遣欧使節（B6）で翻訳が多く、布教史（B4）と伝記（B5）では、主要なもののみ翻訳が行われ、全般には翻訳が少ない傾向が見られる。当時のヨーロッパで、日本の情報が多く盛り込まれたB1やB6に興味を持たれていたのではないか。

表8 ジャンルBの言語別出版点数 (単位 t.)

言語	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B計
dut	4	1	0	4	9	0	0	18
eng	3	1	0	5	12	0	1	22
fre	81	16	0	60	67	14	0	238
ger	35	6	0	8	8	7	4	68
ita	145	23	0	38	42	29	1	278
lat	88	13	7	55	51	17	3	234
spa	53	34	3	34	41	6	2	173
por	18	2	2	10	10	0	0	42
その他	2	2	25	0	3	0	0	32
計	429	98	37	214	243	73	11	1,105

(2) 日本誌・日本論（ジャンルC）

このジャンルは、オランダ商館と関わりのある人による著作が中心のため、17世紀半ば以降の刊行であり、約7割は19世紀に入ってから著作である（表9）。

日本滞在者による滞在記録・日本誌（C1）がこのジャンルの中心だが、医

表9 ジャンルCの出版年別出版点数 (単位 t.)

出版年	C1	C2	C3	C計
1450/99	0	0	0	0
1500/49	0	0	0	0
1550/99	0	0	0	0
1600/49	2	0	0	2
1650/99	13	8	1	22
1700/49	12	2	5	19
1750/99	7	6	8	21
1800/53	52	19	9	80
計	86	35	23	144

師も含んだオランダ商館関係者の著作は54t.と多くない。ゴロヴニンとリコルドの『日本幽閉記』^{39) 77)}が19t.である。これらの著作では宣教師の著作にあった宗教的動機がなくなり、日本の記述がより客観的になっている。1727年に英訳刊行されたケンペルの『日本誌』⁵⁰⁾は、客観性に加え、非常に詳細な記述から、日本研究において最も影響力の大きな著作となった。その約100年後にシーボルトの『日本』⁸⁵⁾(1832-52)が出ている。

博物誌(C2)の中の作品を見ると、17世紀後半から東洋の植物などを集めた著作が出ている。オランダ商館の医師であったライネやクライアーは日本の医学(鍼灸)や薬学をヨーロッパに紹介する著作を、17世紀末に出している。C2の35t.中21t.は、日本及び東洋の植物について書かれたものである。これらには美しい植物図も挿入され、異国情緒も感じられる。今回作成した日本関係洋古書リスト全2,029t.のうち、科学技術の分野に当たるものはこのC2の35t.のみであり、全体の1.7%に過ぎない。

鎖国以降、日本について書かれた著作は点数として非常に少ないが、研究調査の上書かれているため、学術的価値を増しており、カロンやモンタヌス、ケンペル、ティチング、シーボルトらの日本文化論は多くの言語に翻訳された。また、ロシア人のゴロヴニンやリコルドの『日本幽閉記』^{39) 77)}は、19世紀前半の著作だが、北方からの視点で書かれた新しさがあり、これも各国語に翻訳されている。それらの日本論がヨーロッパ人の日本像・アジア像を刺激し、日本や日本人を様々に描き出した著作が書かれることにもなった。これらについては以下の(4) その他で取り扱う。

表10 ジャンルCの言語別出版点数 (単位 t.)

言語	C1	C2	C3	C計
dut	21	1	5	27
eng	17	4	5	26
fre	17	5	5	27
ger	16	7	5	28
ita	0	0	0	0
lat	5	18	0	23
spa	0	0	0	0
por	0	0	0	0
その他	10	0	3	13
計	86	35	23	144

Cのジャンルを言語について見ると(表10)、博物誌(C2)の中の約半数18t.がラテン語で書かれている。自然科学の分野ではまだラテン語が支配的だったようだ。翻訳の状況を見ると、日本滞在記(C1)86t.中の半数43t.が翻訳である。博物誌(C2)の翻訳は1t.と少ない。また、鎖国前後を通じてフランス人はほとんど日本を訪れていないが、Bにフランス語が238t.(Bの21.5%)、Cに27t.(Cの18.8%)あり、重要な著作がフランス語に翻訳されていたことを見ると、フランス語がヨーロッパにおいて、ラテン語に代わって主要言語となったことがわかる。

(3) 航海記・紀行(ジャンルA)

大航海時代以降、旅行者自身による旅行記(A1)の出版が増加した。出版年代と言語の相関を見ると(表11)、16世紀イタリア語(マルコ・ポーロ)→16～17世紀スペイン語→17世紀オランダ語→18世紀フランス語→19世紀英語という、世界を制覇した国の変遷の流れが見てとれる。ポルトガルは16～17世紀に世界的に貿易を行っていたが、ポルトガル語はそれほど多くない。フランス語とドイツ語が全般に多いのは、翻訳も多いためと思われる。17～18世紀には、「東インド」を対象に書かれた著作が多数ある。この分野には当時のベストセラーが存在し、マルコ・ポーロの『東方見聞録』⁷⁰⁾やピントの『東洋遍歴記』⁶⁹⁾などは多くの版を重ね、翻訳も多数ある。18世紀半ば以降、クラシェニンニコフの『カムチャツカ誌』⁵²⁾(1755)やクルゼンシュテルンの『世界周航記』⁵³⁾(1809-13)などロシア人が行った北方探検調査の記録が刊行され、さらに19世紀に入ると、小笠原諸島を探検したイギ

表11 ジャンルAにおける出版年代と言語の相関関係 (単位t.)

	イタリア語	スペイン語	ポルトガル語	オランダ語	ドイツ語	フランス語	英語	その他
1450/99	1	0	0	0	2	0	0	1
1500/49	5	3	1	0	2	0	0	4
1550/99	27	16	7	5	6	11	9	5
1600/49	5	10	10	11	9	15	9	6
1650/99	6	6	2	36	20	27	18	9
1700/49	1	0	6	9	10	38	17	2
1750/99	1	3	4	3	20	17	13	6
1800/53	9	0	2	5	23	29	32	5
計	55	38	32	69	92	137	98	38

表12 ジャンルAの出版年別出版点数

(単位 t.)

出版年	A1	A2	A3	A4	A計
1450/99	4	0	0	0	4
1500/49	8	4	1	2	15
1550/99	36	6	43	1	86
1600/49	47	6	20	2	75
1650/99	91	7	22	4	124
1700/49	40	24	18	1	83
1750/99	47	5	15	0	67
1800/53	73	9	22	1	105
計	346	61	141	11	559

リス人航海士ピーチの『太平洋・ベーリング海峡航海記』¹¹⁾(1831) や、バジル・ホルの『朝鮮琉球航海記』⁴⁵⁾(1818) などもある。

他者の記録・伝聞に基づくアジア誌(A3)は、実体験によらない著作であるが、当時のアジア情報が目新しく、ニーズが高かったためか、大航海時代の初頭から中盤にかけて多く見られる(表12)。この16世紀後半の出版量の山は43t.であるが、そのうち31t.はメンドサの『シナ大王国誌』⁶²⁾(1585)、5t.はバロスの『アジア誌』¹⁰⁾(1552)とその異版、翻訳である。18世紀前半には、サルマナザールの『台湾の歴史と地誌』⁷⁴⁾(1704)が見られ、19世紀のクラブプロートの文集『アジア論集』⁵¹⁾(1824-28)やレミュザの『アジア雑録』⁷⁶⁾(1825-26)といった東洋学の流れへと繋がっていく。

航海記・旅行記集成(A2)で特徴的なことは、18世紀前半に出版量が多く、言語ではフランス語と英語が多いことである。出版エリアとしては、イギリス、フランス、ベネルクスが多い。代表的な集成に、ハクルートの『英国国民の主要な航海』⁴⁴⁾(1599-1600)、プレヴォーの『旅行記集成』⁷³⁾(1746-70)がある。

(4) その他(日本語学、一般世界史、文学作品等)(ジャンルD)

日本語学(D1)は、17t.と全体的に少ない(表13)。キリシタン版の中のイエズス会の『日葡辞書』⁹⁶⁾(1603)、ロドリゲスの『日本大文典』⁸⁰⁾(1604)、ドミニコ会のスペイン人宣教師コリヤドの『日本文典』²⁴⁾(1632)と『日本語辞典』²⁵⁾(1632)といった宣教師による辞書、文法書が始まりである。オランダ商館関係者による日本語についての単行書は見られない。19世紀になると、ヨーロッパにいながらにしての本格的な日本語研究が現れ、出版数も

11t.ある。ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン、クラブロート、プフィッツマイア
 ーらの辞書、日本詩歌や日本文学の翻訳である。

表13 ジャンルDの出版年別出版点数 (単位 t.)

出版年	D1	D2	D3	D4	D計
1450/99	0	0	0	0	0
1500/49	0	0	0	0	0
1550/99	0	1	1	16	18
1600/49	3	12	3	9	27
1650/99	0	7	2	15	24
1700/49	2	15	8	22	47
1750/99	1	14	15	36	66
1800/53	11	3	3	22	39
計	17	52	32	120	221

文学作品 (D3) も 32t. と数は少ないが、航海記・旅行記集成 (A2) と似た出版傾向である。つまり、18世紀に 23t. と多く、言語ではフランス語が 16t. と多く、出版エリアではイギリス、フランス、ベネルクスが多い。日本を素材にした文学であるが、内容はアジアに身を移してヨーロッパ社会を批判的に見るという、風刺的なものが多い。カモンイスの『ルシタニアの人々』¹⁵⁾ (1572) やスモレットの『アトム冒険』⁸⁶⁾ (1769) といった著作がある。

一般世界史 (D2) は 52t. あり、少なくない。やはり 17～18世紀に出版点数が多い。17世紀にはダヴィティの『世界国家百科事典』²⁹⁾ (1614) の異版・翻訳が多数出ており、18世紀にはサモンの『万国国民の現代史』⁸¹⁾ (1725-39) の異版・翻訳が多くなっている。言語としては、フランス語、英語、ドイツ語が多く、出版エリアもフランス、イギリス、ドイツで多い。新しく発見された世界の諸国家の文化・風習・歴史・地理等について百科事典的に編纂されたものである。

その他 (D4) に含まれるものは雑多であり、オルテリウスの『世界地図帳』⁶⁷⁾ (1570) のような日本地図を含む地理学の著作が 26t. とかなり多い。その他比較宗教・比較政治、日本の工芸・鍼灸に至るまで内容は多岐にわたり、16世紀半ばから19世紀まで一貫して出版が見られる。レーナルの『両インド史』⁷⁵⁾ (1770) は、ヨーロッパで初めての植民地世界の百科全書の歴史書であり、革命前のフランスでよく読まれたため*24、多くの異版が出ている。

表14 ジャナルDの言語別出版点数 (単位 t.)

言語	D1	D2	D3	D4	D計
dut	1	4	0	4	9
eng	2	11	7	19	39
fre	2	19	16	40	77
ger	5	11	6	29	51
ita	0	5	1	8	14
lat	4	2	0	18	24
spa	1	0	1	0	2
por	0	0	1	0	1
その他	2	0	0	2	4
計	17	52	32	120	221

Dの分野全体で言語を見ると(表14)、フランス語77t、ドイツ語51t、英語39tである。啓蒙の時代、フランス語が国際語(lingua franca)であったことを反映した結果である。翻訳の状況を見ると、日本語学(D1)では翻訳は全くなく、文学作品(D3)でも、32t.中3t.のみと翻訳は少ない。一般世界史(D2)とその他(D4)で翻訳が多い。特にフランス語や英語のオリジナルから、ドイツ語やオランダ語への翻訳が多く、ドイツ語は、51t.中20t.が翻訳である。

4. 日本関係洋古書の国内での所蔵状況

「2. 調査方法」で述べたやり方で、日本関係洋古書2,029t.の国内での所蔵状況を調査した。ここでは、その調査結果を紹介する。ここでも繰り返し注意するが、各機関の所蔵情報はNACSIS-Webcat等インターネット公開されている目録類の検索結果を用いているので、実際の所蔵を正確には反映していないかもしれない。

4.1 数値で見る全体像

2,029t.のうち国内の少なくとも1機関が所蔵するものは1,312t.で、所蔵率は64.7%である。資料全体の出版傾向と所蔵傾向を割合で見ると、ジャンル、出版年、出版エリア、言語ともほぼ一致しており(図5-8)、国内全体ではバランスよく所蔵されていると言えよう。しかし、タイトル数の比較だけではきちんとした評価ができないので、次の「4.2各ジャンルの所蔵傾向」に

において具体的に個別タイトルで見ていくことにする。

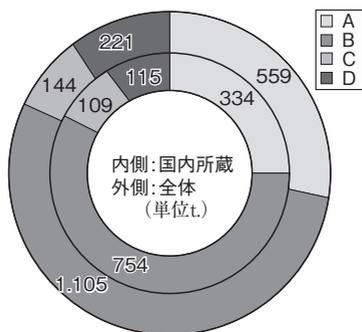


図5 ジャンル別国内所蔵と日本関係洋古書全体の比較

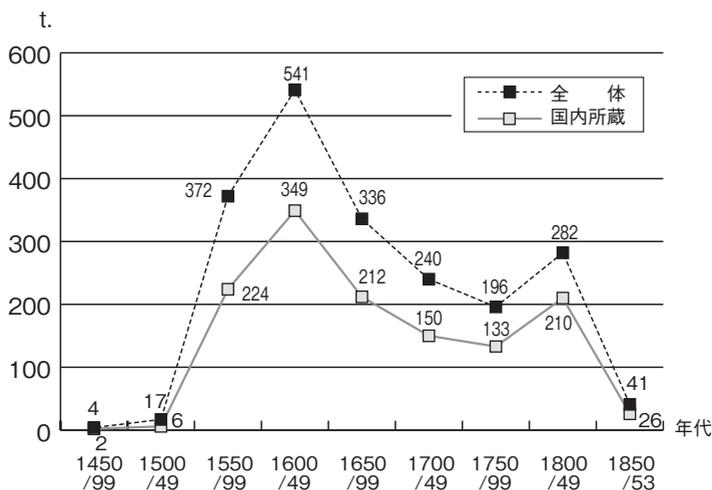


図6 出版年代別国内所蔵と日本関係洋古書全体の比較

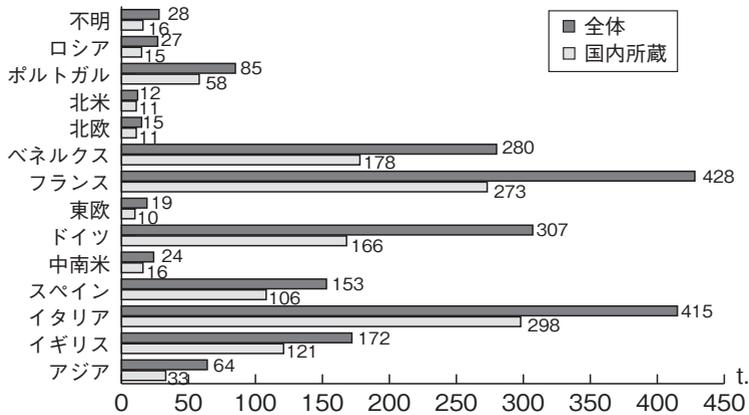


図7 出版エリア別国内所蔵と日本関係洋古書全体の比較

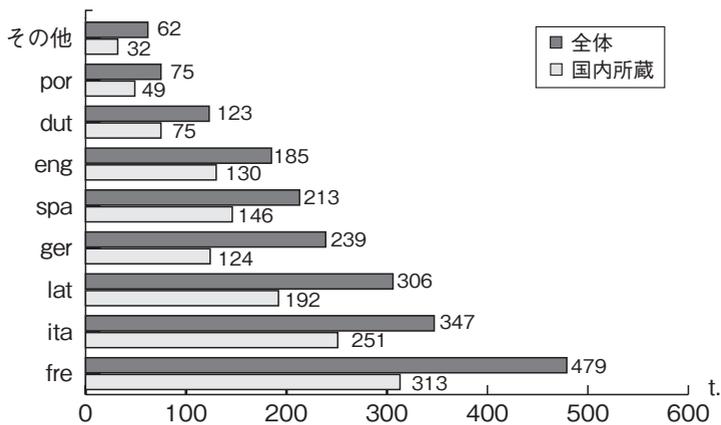


図8 言語別国内所蔵と日本関係洋古書全体の比較

機関別の所蔵タイトル数と同一タイトルを何機関で所蔵しているか示したのが表15である。所蔵されている1,312t.は、1機関のみでの所蔵もあれば、多くの機関で重複する所蔵もある。うち、536t.は1機関だけで所蔵されているということがわかった。また、所蔵タイトルの81.3%は4機関以下の所蔵で、平均すると1t.あたり2.9機関が所蔵する結果となった。天理図書館（以下「天理」）、上智大学図書館（キリシタン文庫蔵書を含む。以下「上智」）、東洋文庫の上位3機関の所蔵数は、約400t.を数え、他を圧倒している。

表15 国内各機関の所蔵資料点数

(単位 t.)

順位	機関名	個別タイトルの国内所蔵機関数					計
		1	2～4	5～9	10～19	20～	
1	天 理	72	201	131	26	2	432
2	上 智	81	186	118	23	1	409
3	東 洋 文 庫	78	165	122	29	2	396
4	筑 波 大	81	157	93	7	0	338
5	N D L	41	126	114	36	2	319
6	京 大	41	95	88	22	1	247
7	日 文 研	28	91	76	36	2	233
8	東 大	22	74	92	29	2	219
9	九 大	18	40	45	28	2	133
10	京 都 外 国 語 大	4	31	63	9	0	107
11	横 浜 開 港 資 料 館	8	36	41	14	1	100
12	千 代 田 図 書 館	8	30	19	10	2	69
	国 内 全 体	536	531	203	40	2	1,312

表16 ジャンル別国内所蔵状況 (単位 t.)

ジャンル	国内所蔵	全体	所蔵率
A	334	559	59.7%
B	754	1,105	68.2%
C	109	144	75.7%
D	115	221	52.0%
計	1,312	2,029	64.7%

表17 出版年代別国内所蔵状況 (単位 t.)

年代	国内所蔵	全体	所蔵率
1450/99	2	4	50.0%
1500/49	6	17	35.3%
1550/99	224	372	60.2%
1600/49	349	541	64.5%
1650/99	212	336	63.1%
1700/49	150	240	62.5%
1750/99	133	196	67.9%
1800/49	210	282	74.5%
1850/53	26	41	63.4%
計	1,312	2,029	64.7%

所蔵状況を分析項目から見ると、ジャンルではB、C、出版エリアでは英米・南欧・フランス、言語では英語・ラテン系言語、出版年代では16世紀半ば以降の資料の所蔵率が高めであるのに対して、Dジャンル、中欧以東のエリア、ドイツ語、16世紀半ば以前の資料は低い結果となった（表16-19）。

表18 出版エリア別国内所蔵状況 (単位 t.)

出版エリア	国内所蔵	全体	所蔵率
ア ジ ア	33	64	51.6%
イギリス	121	172	70.3%
イタリア	298	415	71.8%
スペイン	106	153	69.3%
中南米	16	24	66.7%
ドイツ	166	307	54.1%
東欧	10	19	52.6%
フランス	273	428	63.8%
ベネルクス	178	280	63.6%
北欧	11	15	73.3%
北米	11	12	91.7%
ポルトガル	58	85	68.2%
ロシア	15	27	55.6%
不明	16	28	57.1%
計	1,312	2,029	64.7%

表19 言語別国内所蔵状況 (単位 t.)

言語	国内所蔵	全体	所蔵率
fre	313	479	65.3%
ita	251	347	72.3%
lat	192	306	62.7%
ger	124	239	51.9%
spa	146	213	68.5%
eng	130	185	70.3%
dut	75	123	61.0%
por	49	75	65.3%
その他	32	62	51.6%
計	1,312	2,029	64.7%

4.2 各ジャンルの所蔵傾向

次に各ジャンルの中で、日本関係著作の所蔵の傾向がどのようなものであったかについて具体的に見ていきたい。

(1) 航海記・紀行（ジャンルA）

所蔵率は59.7%と低めである（表16）。所蔵の77.5%は1650年代後半以降の資料である。後年のものが多いためか、英語やイギリス刊行資料が目立った。

所蔵点数が非常に多かったのは、ツェンペリー『日本紀行』⁹¹⁾ (1788-93) やピント『東洋遍歴記』⁶⁹⁾ (1614) で、異版・翻訳を合わせると、それぞれ64、60点の所蔵が確認された。これらに代表されるA1（旅行記）が所蔵204t. で、A2～A4の所蔵が2桁台あるいは1桁台にとどまるのに比べて圧倒的に多いのは、出版量の多さに比例しているようである。A1～A3の所蔵率はいずれも60%前後でとりわけ大きな差異はなかったが、A2（旅行記集成）の所蔵率が63.9%とこのジャンルで最も高かったのは、1点の資料で様々なテキストを読むことが可能であり、異版も多く、比較的入手しやすいためではなかろうか。プレヴォー『旅行記集成』⁷³⁾ (1746-70) の所蔵が最も多く、異版を合わせて14点であった。A3（アジア史・誌）では、タイトルに日本を冠するヴァレニウス『日本王国誌』⁹⁵⁾ (1649) が異版を合わせて46点の所蔵と目立った。A4（その他）は、アジア以外の地域史の中に日本が記述される資料が多く、所蔵率は45.5%と低い。日本やアジア以外をテーマとする資料なので、積極的に収集していないのではなかろうか。所蔵資料は1600年代前半までの刊行のもの、未所蔵資料は1600年代後半以降の刊行のものが多い。

未所蔵資料は、その異版・翻訳が国内で所蔵されている場合が大半であった。最も多いのは、マルコ・ポーロ『東方見聞録』⁷⁰⁾ (1477) の異版・翻訳である。ポルトガル語版⁷²⁾ 以外は、各言語ともいずれかの版が国内に所蔵されている。なお、刊行年が一番古いドイツ語初版は未所蔵である。次いで多いアコスタ著*De natura noui...*²⁾ (1589) やカスタニエダ著*Historia do descobrimento...*⁵⁸⁾ (1551) は、多くの言語での出版が確認されるが、所蔵資料の言語のバリエーションが少ない。前者は7言語のうちオランダ語とフランス語のみ、後者は7言語のうちポルトガル語のみの所蔵であった。しかし、このように言語の偏りがあるケースはさほど多くなかった。各機関とも初版を重視しながら収集していると推測されるが、初版と思われる資料の所蔵は半数程度にとどまっており、入手の難しさがうかがえる。18世紀以降刊行の比較的新しい資料に未所蔵のものが多く見つかったが、すでに入手している

旧版で代替可能なため、新しい版を意図的に収集していないと思われる。未所蔵資料は、異版・翻訳が所蔵されているものを除くと、Hayton: *Liber historiarum partium orientis* (1529)⁴⁷⁾ 等異版のない著作がほとんどであった。そのうち半数以上がコルデイエに未掲載であった。17世紀より前に刊行された資料が多く、1500年代のものも比較的多かった。年代的に古いものが多く、異版が少ない資料で出版点数も限定されるため、入手困難なことが未収の原因と推測される。全体としては、ドイツ・ベネルクス刊行とドイツ語・オランダ語資料に未収のものが多いという特徴が出た。

(2) キリシタン関係 (ジャンルB)

このジャンルの所蔵率は68.2%と高めである(表16)。上智、筑波大学、天理の順でそれぞれ300t.前後を所蔵しており、他機関の所蔵数に比べて圧倒的に多く、実に、国内所蔵754t.の8割がこの3機関のうちいずれかにあることになる。

B1(書簡・年報・通信類)の所蔵率は75.3%と同ジャンル中最も高く、年代の古い資料であるにもかかわらず、約半数のタイトルが複数の機関で所蔵されている。日本あるいは近隣諸国に滞在していた宣教師が発信した日本報告を編纂した、原資料に近い資料のため、各機関の関心が高いと思われる。1577～1601年にイエズス会士により書かれた書簡を収録するヘイ著 *De rebus Iaponicis...*⁴⁶⁾ (1605) や Faivre の編纂したザビエルの書簡集 *Lettres de St. François...*³⁴⁾ (1828) とその補遺 *Lettres des missions du Japon...*⁵⁵⁾ (1830) が所蔵機関10機関と最も多かった。年報では、クエリヨの *Lettera annale portata...MDLXXXII*²²⁾ (1585) や *Alcune lettere delle cose...1579...1581*⁴⁾ (1584) をはじめ、出版量の多いイタリアのもので所蔵機関5以上であるケースが多いことが目を引いた。いずれも布教活動が盛んに行われていた時期(1580～1610)を扱う資料で、日本報告がすべてか大部分を占めている。しかし、B1はもともと出版量の多い資料なので、未所蔵資料タイトル数は106t.もある。この大部分が出版量の激増した1580～1630年代刊行のものであり、大半は書簡集である。言語では、フランス語とラテン語が多い。うち、異版・翻訳の所蔵がある資料を除くと、未収は、*Litterae Societatis Iesu...*⁵⁷⁾ (1589) 等日本関係の記述が少ない資料が多いようである。

B2(迫害・殉教記)の所蔵率は68.4%で、最も多くの機関が所蔵するのは、長崎でのポルトガル人使節の処刑事件の記録であるカルデイム著 *Mors felicissima quatuor...*¹⁶⁾ (1646) の10機関であった。加藤清正による弾圧の記

録Cerqueria: *Relatione della gloriosa morte...*¹⁹⁾ (1607) や最初のキリシタン迫害の記録フロイス著 *Relatione della gloriosa morte...*³⁵⁾ (1599) は、異版・翻訳をそれぞれ10点、11点ずつ所蔵する。未所蔵資料は、迫害が激化する1620年代刊行が多く、また、様々な殉教録の一部として日本を扱うものも少なくない。同じテーマが繰り返し取り上げられ、多くの異版・翻訳が刊行されている。それらを除くと、日本教会史の殉教部分の抜き刷りである *Collaço: Compendiolum historiae...*²³⁾ (1628) や日本でのイエズス会士26名の殉教が主テーマの *Andrade: Sermon que predico...*⁷⁾ (1628) 等ドイツ刊行やスペイン語資料が若干多いようである。

B3 (キリシタン版) の所蔵率は37.8%とかなり低い。キリシタン弾圧で散逸したため、国内に現存するものが非常に少なく、入手の困難さを反映しているといえよう。そのため、所蔵機関が複数のタイトルは稀で、約3万の語彙を含む『日葡辞書』⁹⁶⁾ (1603) のスペイン語訳 *Vocabulario de Japón...*⁹⁷⁾ (1630) が3機関と Cerqueira: *Manuale ad sacramenta...*¹⁸⁾ (1605) の2機関のみであった。キリシタン教義書『どちりいな・きりしたん』³¹⁾ (1600) は異版を含めると3機関が所蔵している。所蔵資料は、教義書類の比率が高い。未所蔵資料は、国内キリシタン版日本語資料が非常に多く、加津佐刊行のものは所蔵が全くない。平家物語を題材にした *Nifon no cotoba...*⁶⁴⁾ (1592) や *Alvares* 『ラテン語文典』*25の構成に倣い日本語文法を体系化したロドリゲス『日本大文典』⁸⁰⁾ (1604-08) 等、宣教師の学習用の日本語文法に関するものが多い。

B4 (布教史) の所蔵率は74.3%で、所蔵の過半数は南欧・フランスを中心とする出版エリアや言語の資料である。一つの著作が後年まで何度も版を重ねることが多く、版にこだわらなければ入手しやすいためか、複数機関で異版・翻訳を所蔵しているケースが多い。異版・翻訳も含めると、クラセ『日本西教史』²⁷⁾ (1689) は57点、アジア布教史を扱うマッフェイ『イエズス会士書簡集』⁶⁰⁾ (1588) は50点が国内にある。なお、『日本キリスト教盛衰史』²⁰⁾ (1715) 等をはじめとするシャルルヴォアの著作は80点もある。未所蔵資料は、17世紀より前に刊行された古いものが6割弱であった。うち、所蔵の異版・翻訳で代替できるものを除くと、*Baños de Velasco y Acevedo: Historia pontifical...*⁹⁾ (1678) 等カトリック史の一環として一部日本を含むものが21t.と多かった。日本を中心に取り上げたものは9t.で、うち *Robin: Précis de l'histoire...*⁷⁸⁾ (1851) のみが日本キリスト教史であり、この他は修道会史であった。テーマでは、来日した宣教師が圧倒的に多いイエズス会関係のものが

12t.と多かった。また、未所蔵資料は、出版エリアではドイツやベネルクス刊行のもの、言語ではスペイン語のものに多く、いずれも異版・翻訳が刊行されていないケースが多かった。

B5 (伝記) の所蔵率は59.3%と低い、異版・翻訳の数が膨大で今回の調査では採用しなかった版もかなりあるため正確な数値とは言いがたい。所蔵されている伝記は、ザビエル伝が群を抜いており、特にプフルの著作¹²⁾ 29t. (多くがフランス語) とトリセリーノの著作⁹²⁾ 23t. (多くがラテン語) の多さが目立つ。所蔵点数は、それぞれ57、52点にのぼる。所蔵資料は、異版・翻訳を除くと、天理、上智、筑波大学の3館でほぼ網羅している状態であり、所蔵機関の偏りが顕著である。他機関では、日本関係として敢えて積極的に収集していない資料のようである。未所蔵資料は、所蔵する異版・翻訳で代替できるものを除くと、7割が出版点数の多い南欧・フランスのエリアや言語の資料で、Accolito、Alegambe、Ambrogio著の3t.のマストリリ伝^{1) 5) 6)} がやや特徴的だが、それ以外はほとんどザビエル伝である。

B6 (遣欧使節関係) の所蔵率は59.3%で、日本のみがテーマとなる資料としては所蔵率が低い。ただ、未所蔵資料の大半が、イタリアとフランスで刊行された天正使節関係の数々の異版・翻訳であるため、大半は所蔵資料で代替できるものである。未所蔵で珍しいものでは、Vilnius (リトアニア) 刊行の*Epistola de legatprum...*³³⁾ (1585) 等がある。所蔵資料では、天正使節関係のものが7割強で、特に、グアルティエーリ『天正遣欧使節記』⁴¹⁾ (1587) は異版・翻訳を含めると5t、26点所蔵と多い。慶長使節関係は、出版タイトル数は少ないもののよく収集されている印象である。

B7 (その他) の所蔵率は45.5%とジャンル中最も低い。アジアにおけるキリスト教史の中で日本に言及しているものが多いが、日本関係とするか判断が分かれるところであろう。所蔵と未所蔵にこれといった特徴は見られないが、日本布教用に最初に印刷された貴重な教理書ヴァリニャーニ著*Catechismus Christianae...*⁹⁴⁾ (1586) が未所蔵となっている。

(3) 日本誌・日本論 (ジャンルC)

所蔵率は最も高い75.7%である (表16)。他のジャンルに比べて日本を主要テーマに扱っている資料が多いこと、鎖国時期に来日を許されていたオランダ人の著作が中心のため、より事実に近い記録が読み取れることから、国内各機関の関心も高いものと思われる。日本研究機関のみならず様々な機関が所蔵しているのが特徴的である。また、前述のジャンルA、Bに比べて出版

年の新しい資料が多く、入手しやすいことも高所蔵率の一因であろうか。

C1（日本誌）の所蔵率は89.5%とジャンル中最も高い。異版を含めて所蔵が多いものは、医師として出島商館に勤務したケンペルの『日本誌』⁵⁰⁾（1727）80点と、自身の来日経験はなく東インド会社関係の記録をもとに記述されたモンタヌス『東インド会社遣日使節紀行』⁶³⁾（1669）62点の2種類の日本誌である。未所蔵資料は、すべて1730年以降の刊行で、どの版も所蔵されていないものは、Hagenaer: *Opisanie o Iaponie...*⁴³⁾（1734）、ゴロヴニン著 *Leben und Leiden...*³⁸⁾（1839）、シーボルト著 *Karte von japanischen...*⁸⁴⁾（1840）のみで、この分野は完璧に近く収集されている資料群と言えよう。中には伝聞からの想像で描かれたような資料も含まれるが、真偽のほどは別として日本の風俗を総合的に記録した資料であるため、各機関が積極的に収集しているものと思われる。

C2（博物誌・医学）の所蔵率は51.4%で、半数の資料しか収集しきれていない結果となった。所蔵資料の大半である植物誌が4機関以上の所蔵であるケースが多いのに対して、それ以外の資料は複数機関で所蔵していても2～3機関にとどまっている。所蔵が非常に多い資料は、異版も含めると、シーボルト『日本植物誌』⁸³⁾（1835-44）の11点、ツェンペリー『日本植物誌』⁹⁰⁾（1784）の15点であった。未所蔵資料は、出版エリアではドイツ刊行、言語ではラテン語とドイツ語が多い。また、Buc'hoz: *Herbier colorié...*¹⁴⁾（1792）等異版のない資料やHoffmann: *Noms indigènes...*⁴⁹⁾（1853）のように学術研究の見地で書かれた資料が多い。後者を日本関係とみなさず、収集対象外としている機関が多いのではないだろうか。コルディエの掲載も半分程度となっている。

日本論全般を取り上げるC3は、フランスで刊行された1点を除き南欧・フランス以外刊行の資料であった。所蔵率は60.9%である。所蔵資料は、歴史的観点から日本を論じたものや日本人論が多く、大半が日本をタイトルに冠するものである。所蔵の多いタイトルは、マクファーレン『日本』⁵⁹⁾（1852）、ブルトン『日本』¹³⁾（1818）、東インド誌の中で日本を取り上げているファレンティン『新旧東インド誌』⁹³⁾（1724-26）で、それぞれ12、11、10機関であった。未所蔵資料は、*Historisch verhaal...*⁴⁸⁾（1768-72）等東インド会社関係として刊行されているものが比較的多い。

（4）その他（日本語学、一般世界史、文学作品等）（ジャンルD）

所蔵率は52.0%と低めである（表16）。A～Cジャンル以外の比較的雑多な

資料を含む。以下少し細かく見ていく。

テーマが日本に限定されるD1（日本語学）の所蔵率は88.2%でジャンル中最高である。日本語彙集のクルゼンシュテルン『東アジア及びアメリカ北西民族の単語集』⁵⁴⁾（1813）とパラス『欽定世界言語比較辞典』⁶⁸⁾（1786-89）以外はすべて所蔵されている。最も所蔵が多かったのは、英和和英対訳辞書であるメドハースト『英和和英語彙辞典』（1830）⁶¹⁾の17機関であった。Collado: *Ars grammatica...*²⁴⁾（1632）他2t.^{25) 26)}のドミニコ会士コリヤドによるカトリック布教のために作成された資料について26点も所蔵があるのは、キリシタン関係として所蔵している機関が多いためのものである。

D2は総合的な世界史の一部として日本を扱った資料である。これらを日本関係とするか否かは機関により見解が分かれるかもしれない。単に世界史資料として収集している機関も多いことだろう。積極的に収集が行われているとは思えず、所蔵率は36.5%と非常に低い。しかし、ダヴィティ『世界国家百科事典』²⁹⁾の14t.を筆頭に異版も多く、これを除いた純粋な未所蔵タイトルは8点のみであった。なお、異版・翻訳の所蔵があっても初版であるケースは非常に少なかった。Gatterer: *Handbuch der Universalhistorie...*³⁷⁾（1761-64）等ドイツ刊行資料、ドイツ語資料に未収のものが多い。所蔵資料では、サーモン『万国国民の現代史』⁸¹⁾（1725-39）の異版・翻訳を含む16点が最も多いが、初版の所蔵は1機関にとどまる。初版が古書市場に出回りにくい状況はあろうが、収集に際して初出に近いテキストかどうかは、さほど重要視されていないのではないかと。

D3（文学作品）の所蔵率は46.9%である。内容がフィクション的なため、日本関係としていない機関が多いのかもしれない。所蔵が多いのは、全18巻中の第16巻でザビエルを描いたドライデンの『著作集』³²⁾（1808）で8機関の所蔵であるが、日本というより英文学の観点で収集されているようである。次いで多いのは、Argens: *Lettres chinoises...*⁸⁾（1751）で、異版を含む6点の所蔵が確認できる。未所蔵資料は、日本関係記述が非常に僅かな資料も収録しているKapitza: *Japan in Europa*^{*9)}（1990）が取り上げているものがほとんどである。Fromaget: *Mirima, impératrice du Japon*³⁶⁾（1745）等タイトルに日本を冠するものも散見されるが、日本関係と判断するか微妙な資料が多く、各機関の収集優先度としては低いのではないだろうか。

D4（その他）は非常に多種多様な資料を含む。世界の国の一つとして日本に関する記述が入っている資料が大多数である。所蔵率はジャンル中では高めの55.0%だが、出版点数が多いので54t.も未所蔵となっている。所蔵が多

いのは、異版を含めて19点あるレーナル『両インド史』⁷⁵⁾(1770)や6機関が所蔵するアーデルング著*Mithridates...*³⁾(1806-17)等がある。日本研究機関以外での所蔵も多い。各学問領域の古典として所蔵しているケースが多いと思われる。所蔵資料は歴史や民俗を扱うものが多く、未所蔵資料には地誌的なものが多い傾向にあるようである。

4.3 所蔵上位3機関(天理、上智、東洋文庫)及び日文研と当館との比較

上位3機関は、いずれも核となるコレクションを初めに持ち、日本関係資料のうちある特定分野に比重を置いて収集を続けてきた機関である。

天理と上智は、それぞれBジャンルが67.8%(432t.中の293t.)、84.6%(409t.中の346t.)を占め、両館とも日本関係資料の大半はキリシタン関係である(図9)。上智のBジャンルの所蔵は、国内一を誇る。出版年では、17世紀までの刊行資料が両館とも7割強でそれ以降のものは非常に少ない(表20、図10)。

表20 他機関と当館(NDL)との比較(年代・ジャンル別)

(単位 t.)

年	ジャンル	機関名					出版点数
		NDL	日文研	天理	上智	東洋文庫	
1450～ 1699	A	37	17	49	23	75	304
	B	100	58	247	284	139	873
	C	6	7	12	8	9	24
	D	5	1	6	4	6	69
小計		148	83	314	319	229	1,270
1700～ 1853	A	66	56	34	7	71	255
	B	30	38	46	62	30	232
	C	52	41	25	16	39	120
	D	23	15	13	5	27	152
小計		171	150	118	90	167	759
合計		319	233	432	409	396	2,029

キリシタン関係資料は、1550年代から出版量が増え始め、1600～1650年代をピークに17世紀終わりまで大量に出版されるが、所蔵状況はその出版量の増減と比例している。天理のキリシタン関係資料は、「広く宗教に関する資料を収集する」という理念のもと、大鳥富士太郎男爵蔵書の購入^{*26}を端緒に、古典籍コレクターとして名高い中山正善氏の意欲的な収集活動^{*27}により蔵書の充実が図られ、今日に至っている。国内で天理のみの所蔵である

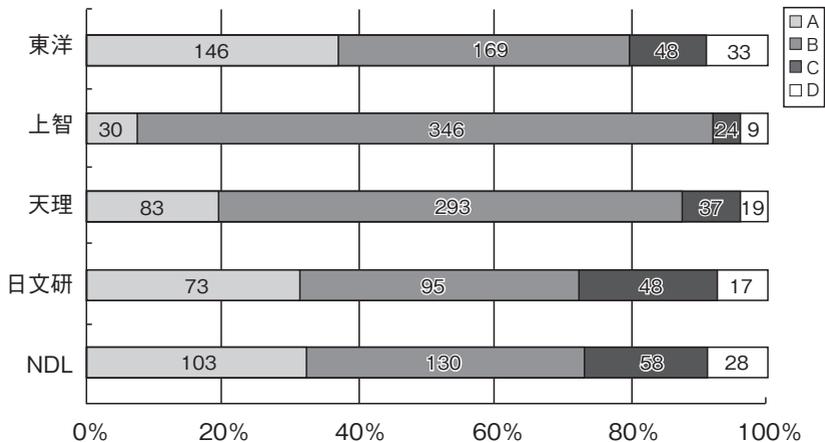


図9 他機関とNDLの比較（ジャンル）

資料（72t.）は、21t.を除きすべてBジャンルで、年報類（21t.）が最も多い。また、Aジャンルの資料の所蔵も83t.を数え、国内第3位の蔵書を誇る。上智の場合は、ラウレス教授収集のキリシタン時代に関する資料コレクション*28を基礎として、学際的視野からキリシタン学関係史料の収集活動*29を行っている。国内で上智のみの所蔵である資料（82t.）は、10t.を除きすべてBジャンルで、伝記類（25t.）や年報類（18t.）が多い。ユニークな蔵書は、中南米で刊行された殉教記類（6t.）である。両館とも基礎となるコレクションを足がかりに、重点的に蔵書構築を図り蔵書内容を発展させていった経緯がうかがえる。

東洋文庫は、所蔵396t.のうち146t.がAジャンルで、Aジャンルの割合（36.9%）が国内一高く（図9）、Aジャンル国内所蔵資料334t.のうち43.7%が同文庫にあるという結果となった。所蔵資料の中でマルコ・ポーロの『東方見聞録』⁷¹⁾の各種刊本が有名であるが、他館の所蔵が1～2t.であるのに対して20t.以上の異版・翻訳を所蔵している。航海記類全体で見ても、バロス¹⁰⁾やタヴェルニエ⁸⁹⁾の著作をはじめとして他館に比べて異版の所蔵が豊富で、国内で同文庫のみの所蔵であるAジャンル資料は44t.を数える。同文庫が、モリソン文庫を基礎に東洋学の研究機関として明確な収集方針*30のもと、蔵書を整備していった経緯が反映されていると言えよう。所蔵資料の6割近くは17世紀までの刊行資料である（表20、図10）。キリシタン関係資料

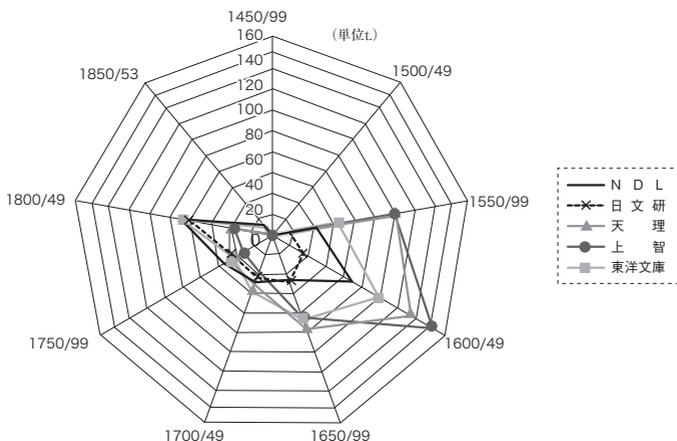


図10 他機関とNDLの比較（出版年）

の所蔵も169tあり、国内第4位の蔵書数である。

これに対して、当館と日文研は、日本関係資料に関して上記3機関のような核となるコレクションを持っていない。日文研では、「外書（外国語で書かれた日本研究図書および訳書）の網羅的収集」*31を目指している。また、国立図書館である当館は、「日本関係資料は「国の蔵書」の欠かせない構成部分としてできるだけ広く収集する」*32ことを方針としている。このように両機関の日本関係資料の収集は、特定の主題に特化しない広い分野の収集が目指されていると言える。収集方針が似ているためか、所蔵資料の内訳をジャンル・出版エリア・言語・出版年で比較すると、当館と日文研がかなり似た傾向であることがわかる（表20-22、図9-10）。18世紀以降に刊行された比較的新しい資料が、当館は171t、日文研150tと多く、17世紀以前に刊行された資料、それぞれ148t、83tを上回っている（表20、図10）。ジャンルでは、キリシタン関係が弱めで航海記類や滞在記類が強い傾向にある（図9）。出版エリアでは、イギリス、言語では、英語の割合が高いのも共通している（表21-22）。

国内で自機関のみ所蔵である資料は、当館が41t、日文研は28tと多くなく、9割近くは他機関と重複するものだった（表15）。日文研と当館との目立った差異は、日文研で異版を広く収集していることで、特にAジャンルでそれが顕著であり、Aジャンルの日文研のみ所蔵である資料はベネルクス刊行であった。また、フランス刊行・フランス語資料所蔵の割合が高い。この

点を除けば、両機関は、上位3館とは対照的に、分野を限定せず万遍なく日本関係資料を収集することを目指していると言える。

表21 他機関と当館（NDL）との比較（出版エリア別） （単位 t.）

出版エリア	機関名				
	NDL（割合）	日文研（割合）	天理（割合）	上智（割合）	東洋文庫（割合）
アジア	9（2.8%）	0（0%）	18（4.2%）	5（1.2%）	12（3.0%）
イギリス	47（14.7%）	44（18.9%）	27（6.3%）	15（3.7%）	52（13.1%）
イタリア	53（16.6%）	24（10.3%）	105（24.3%）	135（33.0%）	86（21.7%）
スペイン	20（6.3%）	8（3.4%）	52（12.0%）	39（9.5%）	28（7.1%）
中南米	2（0.6%）	1（0.4%）	7（1.6%）	10（2.4%）	3（0.8%）
ドイツ	39（12.2%）	26（11.2%）	46（10.6%）	61（14.9%）	44（11.1%）
東欧	2（0.6%）	1（0.4%）	2（0.5%）	2（0.5%）	2（0.5%）
フランス	62（19.4%）	63（27.0%）	66（15.3%）	73（17.8%）	68（17.2%）
ベネルクス	48（15.0%）	50（21.5%）	63（14.6%）	43（10.5%）	75（18.9%）
北欧	4（1.3%）	7（3.0%）	1（0.2%）	3（0.7%）	2（0.5%）
北米	4（1.3%）	2（0.9%）	0（0%）	0（0%）	1（0.3%）
ポルトガル	20（6.3%）	5（2.1%）	36（8.3%）	21（5.1%）	17（4.3%）
ロシア	8（2.5%）	0（0%）	4（0.9%）	0（0%）	4（1.0%）
不明	1（0.3%）	2（0.9%）	5（1.2%）	2（0.5%）	2（0.5%）
計	319（100%）	233（100%）	432（100%）	409（100%）	396（100%）

表22 他機関と当館（NDL）との比較（言語別） （単位 t.）

言語	機関名				
	NDL（割合）	日文研（割合）	天理（割合）	上智（割合）	東洋文庫（割合）
fre	70（21.9%）	77（33.0%）	81（18.8%）	67（16.4%）	83（21.0%）
ita	44（13.8%）	20（8.6%）	89（20.6%）	103（25.2%）	75（18.9%）
lat	44（13.8%）	28（12.0%）	69（16.0%）	97（23.7%）	59（14.9%）
ger	32（10.0%）	18（7.7%）	27（6.3%）	30（7.3%）	30（7.6%）
spa	28（8.8%）	11（4.7%）	74（17.1%）	60（14.7%）	41（10.4%）
eng	50（15.7%）	45（19.3%）	28（6.5%）	16（3.9%）	54（13.6%）
dut	20（6.3%）	26（11.2%）	23（5.3%）	16（3.9%）	35（8.8%）
por	19（6.0%）	2（0.9%）	31（7.2%）	16（3.9%）	12（3.0%）
その他	12（3.8%）	6（2.6%）	10（2.3%）	4（1.0%）	7（1.8%）
計	319（100%）	233（100%）	432（100%）	409（100%）	396（100%）

5. まとめ

最後に、日本関係洋古書の当館の蔵書、および国内における所蔵状況についてまとめておきたい。まず当館の蔵書についてであるが、上述したとおり、独自色が薄い。当館のみの所蔵は、国内に異版の所蔵がない資料に絞ると11tのみである。1597年の長崎での三木パウロら3人の日本人殉教を記録する *Tag-zeiten...*⁸⁸⁾ (1674) と Gorlov; *Istoriia Iaponii...*⁴⁰⁾ (1835) 以外は、ノールト著 *Beschryvinghe vande...*⁶⁵⁾ (1602) や d'Anania: *L'universale fabrica...*²⁸⁾ (1576) 等必ずしも日本だけを取り上げた資料ではない。

これまで当館では、詳細な収集基準を持たずに日本関係洋古書の収集を行ってきた。今後どのように蔵書を構築すべきか大きな課題であるが、今回の調査を行ったことで、当館の日本関係洋古書の蔵書構成の特徴が明らかになった。当館の収集方針書*³²⁾に「17世紀以前の刊行物は、日本関係資料…等当館の蔵書の特徴を強化する資料に限定し、…収集する」とある。今回の調査により、Cジャンルで国内1位の58t.を所蔵すること、Aジャンルでは国内2位の103t.を所蔵することがわかった。蔵書の補完という点では、博物誌や航海記を重点的に収集することも考えられよう。また、問題点としては、国内他機関と重複のない当館独特の資料の所蔵が非常に少ないこと、17世紀以前刊行の資料が少ないこと、Bジャンルが少ないことが挙げられる。

次に、国内所蔵状況についても、今回の調査により不完全ではあるものの、大まかに概観することができた。全般的に見ると、日本関係洋古書は様々な機関でこつこつとよく収集されており、国内の所蔵は、調査前に想像していたよりもよい状況であるという結果となった。異版・翻訳の刊行されている資料でどの版も国内に所蔵が全くないというケースは少なかった。国内の未収資料は、入手が困難である、あるいは日本に関する記述が比較的少ないというケースが多かった。周辺諸国と並列して日本を見た資料は、西欧の「日本像」のイメージの変遷を追うために非常に役立つと思われるのだが、こうした資料の未収がやや目立った。

当館と国内機関共通の傾向としては、ドイツ刊行資料が少ないこと、ドイツ語・ラテン語資料が少ないこと、必ずしも初版と思われる資料を所蔵していないこと、複数機関で所蔵が重複する資料が意外に多いことがわかった。国内全体としての蔵書という観点で言えば、他機関と重複を避けて補完すべき部分を埋めていく収集を検討することも考えられよう。それには、他機関

の収集範囲や収集優先度を知ることも重要である。例えば、日本関係洋古書を収集する機関が相互に情報を交換し、共有することは、互いの蔵書構築計画において非常に有益であると思われる。

注

- * 1 Pagès, L.: *Bibliographie japonaise ; ou, Catalogue des ouvrages relatifs au Japon qui ont été publiés depuis le XV^e siècle jusqu'à nos jours* (Paris, 1859)
- * 2 Cordier, H.: *Bibliotheca Japonica; dictionnaire bibliographique des ouvrages relatifs à l'Émpire japonais rangés par ordre chronologique jusqu'à 1870, suivi d'un appendice renfermant la liste alphabétique des principaux ouvrages parus de 1870 à 1912* (Paris, 1912)
- * 3 Wenckstern, Friedrich von: *A bibliography of the Japanese empire* (v.1 Leiden 1895, v.2 Tokyo 1907) *収録年代1859-1906
- * 4 Nachod, Oskar; Praesent, Hans; Haenisch, Wolf: *Bibliographie von Japan* (Leipzig, 1928-40) 6 Bd.
- * 5 Praesent, Hans: *Bibliographie von Japan, Bd.7: 1938-1943* (Hamburg, 1985)
- * 6 藤津滋生「外国語による日本研究文献の書誌学的研究」、『日本研究』(通号10) [1994.08] pp.403-418.
- * 7 Japan-Institut (Berlin) & Deutsches Forschungsinstitut (Kyoto) :*Bibliographischer Alt-Japan-Katalog, 1542-1853* (Kyoto, 1940)
- * 8 林杲之介「日本関係欧文図書の書誌」、『参考書誌研究』(通号1) [1970.11] pp.73-82.
- * 9 Kapitza, Peter: *Japan in Europa; Texte und Bilddokumente zur europäischen Japankenntnis von Marco Polo bis Wilhelm von Humboldt* (München, 1990)
- * 10 上智大学キリシタン文庫 Laures Rare Book Database (<http://133.12.23.145:8080/html/index.html>)
- * 11 主な日本関係洋古書の全文画像には以下のようなものがある。
 - 1) 上智大学 Laures Virtual Rare Book Library (<http://133.12.23.145:8080/AnaServer/Laures10+0+pageview.anv>) に *Avisi particolari delle Indie* (1552) など233点。
 - 2) 筑波大学附属図書館 ベッソン・コレクション (<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/collection-syokai.html#203>) に、*Oratio habita a Fara D. Martino Iaponio, suo & socioru nomine..* (1587) (『原マルチノの演説』) など377点。
 - 3) 国際日本文化研究センター 貴重書データベース (<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/kicho.html>) に A. Montanus: *Atlas Japonensis* (1670) など42点。
 - 4) 同志社大学図書館 貴重書デジタルアーカイブ 「ケーリ文庫」 (http://elib.doshisha.ac.jp/japanese/digital/cary_bunko.html) に *A true description of the mighty kingdoms of Japan and Siam* (1663) など9点、同「その他(洋書)」(<http://elib.doshisha.ac.jp/japanese/digital/yosyo.html>) に Kaempfer: *The history of Japan* (1728) など10点。

また、東洋文庫の「全文公開 画像データベース-モリソン文庫他・善本洋書」(<http://www.toyo-bunko.or.jp/>) も、2007年11月から全文画像の公開を開始した他、京都大学、九州大学でも数点の全文電子画像を公開している。

- *12 Mezhev, Vladimir Izmailovich: *Bibliografia Azii* (Sanktpeterburgie, 1891–94)
- *13 『日本研究欧文書誌集成 第9巻：日本書誌』(1998) p.395：解題。
- *14 *Catalogue of pre-1900 printed books on Japan in European languages in the library of the International Research Center for Japanese Studies* (Kyoto, 1998)
- *15 「Karlsruher Virtueller Katalog」(<http://www.ubka.uni-karlsruhe.de/hylib/en/kvk.html>)
- *16 筑波大学附属図書館新館増築記念特別展ワーキング・グループ『天正少年使節と『原マルチノの演説』』(1995) *ベッソンコレクションは、筑波大学OPAC「Tulips」(<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/portal/>)でも検索可能。
- *17 故内田嘉吉氏記念事業実行委員『『内田嘉吉文庫』図書目録 1-5』復刻版 龍溪書舎(1998) *稀観書は千代田区立図書館「内田嘉吉検索システム」(<http://www.library.chiyoda.tokyo.jp/search/uchida.html>)で検索可能。
- *18 Kyoto University of Foreign Studies :*Nipponalia* [本編], Supplement [1], Supplement 2 (Kyoto, 1972–84)
- *19 東洋文庫「欧米語資料 ラテン文字資料」(<http://www3.toyo-bunko.or.jp/open/LatinQueryInput.html>)
- *20 天理図書館『天理図書館稀書目録 洋書之部1-4』(1941–89) (天理図書館叢書13, 16, 22, 41)
- *21 ドミニック・ジュリア「読書と反宗教改革」、ロジェ・シャルティエ編『読むことの歴史：ヨーロッパ読書史』(2000) p. 369.
- *22 金井圓『近世日本とオランダ』(1993) pp. 98–99.
- *23 五野井隆史「日本イエズス会の通信について」、『東京大学史料編纂所研究紀要』第11号(2001) pp. 154–167.
- *24 ハンス＝ユルゲン・リューゼブリック「批評家と歴史家としての翻訳者」、中川久定、J. シュローバハ編『十八世紀における他者のイメージ』(2006) p. 199.
- *25 Alvares, Manuel: *De institutione grammatica libri tres* (Olyssippone, 1572)
- *26 反町茂雄『天理図書館の善本稀書』(1980) pp. 185–193.
- *27 浜田泰三『やまとのふみくら』(1994) pp. 34–50.
- *28 岩猿敏生、岡本正、林杲之介『日本文庫めぐり』(1964) p. 243.
- *29 「学際的視野から国内外のキリシタン学関係史資料の蒐集、研究、出版などの事業を行ない、その成果を公表して本大学における教育と研究に役立てると同時に、キリシタン学に関する専門図書館として広く学界に貢献している。」、上智大学：研究・産学連携. キリシタン文庫 (<http://www.sophia.ac.jp/J/research.nsf/Content/kirisitan>)
- *30 「東洋文庫 The Toyo Bunko は、... (中略) ... 中華民国総統府顧問をつとめたジョージ・アーネスト・モリソン氏 (1862–1920) の蔵書を購入して設けた東洋学の専門図書館ならびに研究所です。... (中略) ... 東洋学全般に亘る専門図書館ならびに研究所として国内では最大、国際的にも世界五指の一つに数えられ、こうした伝統と学問的評価を背景にして、広くアジア全域を対象とする東洋学の中心的センターの役割を果たしています。」、東洋文庫：東洋文庫の紹介. 沿革・略史、「東洋学研究の専門図書館としての東洋文庫には、中国のほか、日本、朝鮮、満洲、蒙古、シベリア、中央アジア、チベット、西アジア、エジプト、インド、東南アジア等、広くアジア諸地域の歴史文献資料が集められており、コレクション全体が一つの貴重な文化財を形成しています。」、東洋

文庫：図書館資料. 図書館業務 (<http://www.toyo-bunko.or.jp/>)

- *31 「外国語で書かれた日本研究図書および訳書を、本センターでは「外書」と呼び、その網羅的収集を行っています。」、国際日本文化研究センター：図書館. 主なコレクション (<http://www.nichibun.ac.jp/lib/collect.html>)
- *32 「資料収集方針書（第3版）」（平成16年 国立国会図書館）

付表：本文中に引用した日本関係洋古書リスト (著者名のアルファベット順)

- 1) Accolito, Giovanni: *Vita del p. Marcello Francesco Mastrilli della Compagnia di Gesu* (Bologna, 1655)
- 2) Acosta, José de: *De natura noui orbis libri duo et de promulgatione euangelii apud barbaros siue de procuranda Indorum salute libri sex* (Salmanticae, 1589)
- 3) Adelung, Friedrich von: *Mithridates oder allgemeine Sprachenkunde...* (Berlin, 1806–17)
- 4) *Alcune lettere delle cose del Giappone, dell'anno 1579 insino al 1581* (Roma, 1584)
- 5) Alegambe, Philippe: *Vita venerabilis P. Marcelli Francisci Mastrilli e Soc. Jesu* (Viennae Austriae, 1678)
- 6) Ambrogio, Antonio Maria: *Ragguaglio istorico della vita virtu e morte del padre Marcello Francesco Mastrilli...* (Firenze, 1749)
- 7) Andrade, Alonso de: *Sermon que predico el P. Alonso de Andrada de la Compañia de Iesu...* (Orihuela, 1628)
- 8) Argens, Jean-Baptiste de Boyer: *Lettres chinoises, ou Correspondance philosophique, historique et critique entre un chinois voyageur à Paris...* (La Haye, 1751)
- 9) Baños de Velasco y Acevedo, Juan: *Historia pontifical, general y catholica* (Madrid, 1678)
- 10) Barros, João de: *Asia de Joam de Barros dos factos que os portugueses fizeram no descobrimento & conquista dos mares & terras do Oriente* (Lixboa, 1552–63)
- 11) Beechey, Frederick William: *Narrative of a voyage to the Pacific and Beering's Strait, to co-operate with the Polar expeditions* (London, 1831)
- 12) Bouhours, Dominique: *La vie de Saint François Xavier de la Compagnie de Jésus apostre des Indes et du Japon* (Paris, 1682)
- 13) Breton, Jean Baptiste Joseph: *Le Japon, ou moeurs, usages et costumes des habitans de cet empire...* (Paris, 1818)
- 14) Buc'hoz, Pierre-Joseph: *Herbier colorié du Japon faisant suite à l'herbier colorié des plantes de la Chine...* (Paris, 1792)
- 15) Camões, Luis de: *Os Lusíadas* (Lisboa, 1572)
- 16) Cardim, Antonio Francisco: *Mors felicissima quatuor legatorum Lusitanorum...* (Romae, 1646)
- 17) Cardim, Antonio Francisco: *Relaçam da gloriosa morte de quatro embaixadores*

- Portuguezes...* (Lisboa, 1643)
- 18) Cerqueira, Luís: *Manuale ad sacramenta ecclesia ministranda* (Nangasaquii, 1605)
 - 19) Cerqueira, Luís: *Relatione della gloriosa morte patita da sei Christiani Giaponesi...* (Roma, 1607)
 - 20) Charlevoix, Pierre-François-Xavier de: *Histoire de l'établissement, des progrès et de la décadence du christianisme dans l'Empire du Japon* (Rouen, 1715)
 - 21) Charlevoix, Pierre-François-Xavier de: *Histoire et description générale du Japon* (Paris, 1736)
 - 22) Coelho, Gaspar: *Lettera annale scritta di novo dal Giappone, delle cose ivi successe l'anno MDLXXXII* (Venetia, 1585)
 - 23) Collaço, Antonio: *Compendiolum historiae trium martyrum e Societate Jesu, in Iaponia...* (Coloniae, 1628)
 - 24) Collado, Diego: *Ars grammatica Iaponica lingua* (Romae, 1632)
 - 25) Collado, Diego: *Dictionarium sive Thesauri lingua Iaponicae compendium* (Romae, 1632)
 - 26) Collado, Diego: *Niffon no cotoba ni yo confesion, vo mosu yodai to mata confesor yori...* (Romae, 1632)
 - 27) Crasset, Jean: *Histoire de l'église du Japon* (Paris, 1689)
 - 28) d'Anania, Giovanni Lorenzo: *L'universale fabrica del mondo, overo Cosmografia : diuisa in quattro trattati ...* (Venetia, 1576)
 - 29) d'Avity, Pierre: *Les empires, royaumes, estats...* (S. Omer, 1614)
 - 30) *Dochiriina Kirishitan* (Kazusa, 1591)
 - 31) *Doctrina Christan* (s.l., 1600)
 - 32) Dryden, John: *The works of John Dryden* (London, 1808)
 - 33) *Epistola de legatorum Iaponicorum Orientalium adventu ad Gregorium XIII* (Vilnae, 1585)
 - 34) Faivre, Antoine M.: *Lettres de St. François Xavier, apôtre des Indes et du Japon* (Lyons & Paris, 1828)
 - 35) Fróis, Luís: *Relatione della gloriosa morte di XXVI posti in croce per comandamento del Re di Giappone...* (Roma, 1599)
 - 36) Fromaget, Nicolas: *Mirima, impératrice du Japon* (La Haye, 1745)
 - 37) Gatterer, Johann Christoph: *Handbuch der Universalhistorie : nach ihremgesamten Umfange von Erschaffung der Welt bis zum Ursprunge der meisten heutigen Reiche und Staaten* (Göttingen, 1761–64)
 - 38) Golovnin, Vasilii Mikhailovich: *Leben und Leiden eines russischen Seebefehlshabers und seiner sechs Gefährten während einer mehr als zweijährigen Gefangenschaft untern den Japanern...* (Zürich, 1839)
 - 39) Golovnin, Vasilii Mikhailovich: *Zapiski flota kapitana Golovnina o prikliucheniakh ego v plienu...* (Sanktpeterburgie, 1816)
 - 40) Gorlov, N.: *Istoriia Iaponii, ili Iaponiia v nastoiashchem vidie* (Moskva, 1835)
 - 41) Gualtieri, Guido: *Relationi della venuta de gli ambasciatori Giaponesi à Roma,*

- sino alla partita di Lisbona* (Milano, 1587)
- 42) Guzman, Luis de: *Historia de las misiones que han hecho los religiosos de la Compañia de Jesus...* (Alcala, 1601)
 - 43) Hagenauer, Hendrik: *Opisanie o Japone, soderzascee v sebe tri casti, to est'...* (St. Petersburg, 1734)
 - 44) Hakluyt, Richard: *The principal navigations, voyages, traffiques and discoveries of the English nation...* (London, 1599-1600)
 - 45) Hall, Basil: *Account of a voyage of discovery to the west coast of Corea, and the Great Loo-Choo Island* (London, 1818)
 - 46) Hay, John: *De rebus Iaponicis, Indicis, et pervanis espistolae recentiores* (Antverpiae, 1605)
 - 47) Hayton, Frère: *Liber historiarum partium orientis* (Haganae, 1529)
 - 48) *Historisch verhaal van het begin, den voortgang en den tegenwoordigen staat des koophandels van de Generale Nederlandsche geotroyeerde Oost-Indische Compagnie* (Arnhem, 1768-72)
 - 49) Hoffmann, Johann Josef: *Noms indigènes d'un choix de plantes du Japon et de la Chine...* (Paris, 1853)
 - 50) Kaempfer, Engelbert: *The history of Japan* (London, 1727)
 - 51) Klaproth, Julius von: *Mémoires relatifs à l'Asie* (Paris, 1824-28)
 - 52) Krashennikov, Stepan Petrovich: *Opisanie zemli Kamchatki* (Sanktpeterburgie, 1755)
 - 53) Kruzenshtern, Ivan Fedorovich: *Puteshestvie vokrug svieta v 1803, 4, 5 i 1806 godakh* (Sanktpeterburg, 1809-13)
 - 54) Kruzenshtern, Ivan Fedorovich: *Woörter-Sammlungen aus den Sprachen einiger Voölker des östlichen Asiens und der Nordwest-Küüste von Amerika* (St. Petersburg, 1813)
 - 55) *Lettres des missions du Japon, ou supplément aux lettres de S. François Xavier* (Lyons & Paris, 1830)
 - 56) Linschoten, Jan Huygen von: *Itinerario* (Amstelredam, 1595-96)
 - 57) *Litterae Societatis Iesu duorum annorum M.D. LXXXVI et M.D. LXXXVII ad patres et fratres eiusdem Societatis* (Romae, 1589)
 - 58) Lopes de Castanheda, Fernam: *Historia do descobrimento & conquista da India pelos Portugueses* (Coimbra, 1551)
 - 59) MacFarlane, Charles: *Japan* (New York, 1852)
 - 60) Maffei, Giovanni Pietro: *Historiarum Indicarum libri XVI* (Florentiae, 1588)
 - 61) Medhurst, Walter Henry: *An English and Japanese, and Japanese and English vocabulary* (Batavia, 1830)
 - 62) Mendoza, Juan González de: *Historia de las cosas mas notables, ritos y costumbres, del gran reyno dela China...* (Roma, 1585)
 - 63) Montanus, Arnoldus: *Gedenkwaerdige gesantschappen der Oost-Indische Maatschappij in 't Vereenigde Nederland, aan de Kaisaren van Japan* (Amsterdam, 1669)

- 64) *Nifon no cotoba to historia vo narai xiran to fossuru fito no tameni xeva ni yavaraguetaru Feiqe no Monogatari* (Amacusa, 1592)
- 65) Noort, Olivier van: *Beschryvinghe vande uoyagie om den geheelen Werelt Cloot* (Rotterdam, 1602)
- 66) *Oratio habita a Fara D. Martino Iaponio...* (Goae, 1588)
- 67) Ortelius, Abraham: *Theatrum orbis terrarum* (Anverpiae, 1570)
- 68) Pallas, Peter Simon: *Linguarum totius orbis vocabularia comparativa* (Petropoli, 1786–89)
- 69) Pinto, Fernão Mendes: *Peregrinaçam de Fernam Mendez Pinto...* (Lisboa, 1614)
- 70) Polo, Marco: *Buch des edlen Ritters und Landfahrers Marco Polo* (Nuremberg, 1477)
- 71) Polo, Marco: *Delle maravigliose cose del mondo* (Venice, 1496)
- 72) Polo, Marco: *Ho liuro de Nycolao Veneto* (Lyxboa, 1502)
- 73) Prévost, l'abbé: *Histoire générale des voyages, ou nouvelle collection de toutes les relations de voyages...* (Paris, 1746–70)
- 74) Psalmanazar, George: *An historical and geographical description of Formosa* (London, 1704)
- 75) Raynal, Guillaume Thomas François: *Histoire philosophique et politique, des établisement et du commerce des européens dans les deux Indes* (Amsterdam, 1770)
- 76) Rémusat, Abel: *Mélanges Asiatiques* (Paris, 1825–26)
- 77) Rikord, Petr Ivanovich: *Zapiski flota kapitana Rikorda o plavanii...* (Sanktpeterburgie, 1816)
- 78) Robin, Léon-V.-P.: *Précis de l'histoire du christianisme au Japon...* (Lons-le-Saunier, 1851)
- 79) Rodrigues, João: *Arte breve da lingoa Japoa...* (Amacao, 1620)
- 80) Rodrigues, João: *Arte da lingoa de Japam...* (Nangasaqui, 1604–08)
- 81) Salmon, Thomas: *Modern history : or, The present state of all nations...* (London, 1725–39)
- 82) *Sanctos no gosagueono uchi nuqigaqi* (Cazusa, 1591)
- 83) Siebold, Philipp Franz von: *Flora Japonica* (Lugduni Batavorum, 1835–44)
- 84) Siebold, Philipp Franz von: *Karte vom Japanischen Reiche nach Originalkarten und astronomischen Beobachtungen der Japaner* (Leiden, 1840)
- 85) Siebold, Philipp Franz von: *Nippon* (Leyden, 1832–52)
- 86) Smollett, Tobias: *The history and adventures of an atom* (London, 1769)
- 87) Spinola, Fabio Ambrosio: *Vita del P. Carlo Spinola...* (Roma, 1628)
- 88) *Tag-Zeiten oder Sibenstundige Gemuts-Erhebungen...* (München, 1674)
- 89) Tavernier, Jean Baptiste: *Les six voyages de Jean Baptiste Tavernier...* (Paris, 1676–77)
- 90) Thunberg, Carl Peter: *Flora Japonica* (Lipsiae, 1784)
- 91) Thunberg, Carl Peter: *Resa uti Europa, Africa, Asia, föörraättad aären 1770–1779* (Upsala, 1788–93)
- 92) Torsellino, Orazio: *De vita Francisci Xaverii qui primus è Societate Iesu in India,*

- & Iaponia evangelium promulgavit* (Romae, 1594)
- 93) Valentin, Francois: *Oud en nieuw Oost-Indien...* (Dordrecht, 1724-26)
- 94) Valignano, Alessandro: *Catechismus Christianae fidei, in quo veritas nostrae religionis ostenditur...* (Olyssipone, 1586)
- 95) Varenus, Bernhardus: *Descriptio regni Iaponiae* (Amstelodami, 1649)
- 96) *Vocabulario da lingua de Japam com a declaração em Portugues...*
(Nangasaqui, 1603)
- 97) *Vocabulario de Japón declarado primero en Portugues* (Manila, 1630)
- 98) 太平記抜書 (s.l., c.1612)

(さいとう ひさこ 主題情報部人文課)
(ひるた あきこ 収集部外国資料課)
(わたなべ ふくこ 収集部外国資料課)